414
A 2001

大正十一年四月
大蔵省印刷局

目録

一 地租改正所由累説
二 地租改正増減概表
三 地所賣買敷禁令ノ収税法施設之儀伺
四 地券渡方規則 追加改正ヲ
五 内国租税改正見込申上
但金穀大使ヲ以テ諮詢申上ル
六 石高廃止之儀伺
七 地租改正伺
八 地租改正法

九

地方官心得書

外

阪西百報

山口縣地租改正局

二冊

地租改正所由畧說

幸未以来上申スル所ノ地租改正議ヲ之ニ規畧者類ヲ纂メ且其止ムヲ得サル所以ノ来由ヲ略述シテ以テ矢ヲ酌ニ供ス

抑租庸調ノ古法ハ大寶令ニ明文アリト雖モ後世傳ルヲ中古以来争乱相踵キ武門士ナルモノ各國ニ基時容耕戰ヲ務メ以テ其利ヲ富ミシヨリ收租方法モ多ク兵役名賦ノ類ニ基ツキ其他ミミノ習気ト時勢ニ因リ立將ノ意匠ヲ以テ賦課セシモノヲ加ヘ定規律ナキ分論ス度量衡ノ如キニ至ツテモ若其制ノ異ニセリ降テ

徳川氏ニ至ル二百余年ノ太平ヲ致スト雖
モ前古擾乱ノ久シキニ懲リ休息無事ヲ要
務トナシ制度百端文習煥ヲ呈シ田租ノ
制ニモ改ツテモ其親シク管スル所ノ國々ハ租整理
ヲ加フト雖モ國土大名ノ管スル所ニ至ツテハ意ニ之レ
ヲ改ムル能ハス尋テ成度変革ノ秋ニ及ヒ往々地租改正
ノ議ヲ唱フルモノアリト雖モ実際着手ノ難キヲ
以テ未タ其議ヲ達明スルモノアラス爾後幸ニ
廢藩立県ノ命出ルニ及ヒ当省ニ於テ首トシテ
其議ニ及ヒ地券発行ノ法ヲ議定シ五年正月

太政官上申ニ先准ヲ得歩ヲ東京府下ニ地券税
法ヲ發行シ尋テ四年地所賣買ノ厳禁ヲ解キ地
券ヲ附與スルホノ一ヲ券行セリ
是ヨリ前キ世ノ税法ヲ識スルモノ往々田地ヲ再撿シテ石
盛ノ均シカラサルヲ整理シ以テ田租ヲ公平ニセントノ説アリ
然レ共此説ノ如キハ最忌ニ渉リ実際行ヒ難ハ
サルモノナリ如何トナレハ徳川氏ノ時再撿又ハ地押
ノ行ハレシ必ラス税額ヲ増加スル力故ニ再撿ハ政
府ニ於テ地租ヲ増ス可キ意ヲ示シ民ノ念慮
民心ニ関シ為セリ況テ大名領主ノ管内ニ於テ知キ

大蔵省

大石高ヲ増加シ其ノ間ヲ考慮セントスル私欲アルヲ以テ山ニ高ヲ附シ川ニ高ヲ賦スルノ数比之ヨリ然レトモ其実收ヲ増ス能ハス故ニ其ノ歳入ノ虚石ヲ増加スルモ其実ハ其石ニ憑スル能ハスシテ各種姑息ノ賑救法ヲ設ケテ民心ヲ慰スルモ民ハ其石ノ増加スルニ恐懼シテ據地又ハ地押ノ挙ヲ聞ケハ荷擔シテ立ントスルノ情勢アレハ決シテ行ハレサルノ空論ナリ

但此際ニ當リ集議判官神田孝平会津藩士櫻井鼎介ハ地價ニ税ヲ賦スルノ議アリ最改正論ノ高矢ヲモ唱フ可シ

然シテ其端緒既ニ開ラクト雖モ実際ノ着手ノ如キ実ニ容易ナラサルヲ以テ地券ヲ附與スルノ事ハ務ニ而已殆ント一歳ヲ閲セリ尋テ癸酉四月地方官會同ノ時ニ臨ミ地租改正ノ議亦大ニ起レリ此時ニ及テ暫ラク旧法ヲ維持セントノ議論ニアリト雖モ大暑改正ヲ要スルノ論十ノ九ニ居リ然シテ其改正ヲ要スルモノハ悉皆地券法ヲ可トスト雖モ時ノ情勢ヲ斟酌シ暫ラク金穀税ヲ施行セントノ議スルモノ亦多ク其ノ一二ニ居リ於是寺島得失ヲ計較セシカ又メ数員ヲ撰ミ其方法ヲ調査セシムルニ及ヒ金穀税ヲ主張スルモノモ竟

地券ノ法ニ左程ニ異ノ方法ノ書出ツルニ及ヒ議員一回之レヲ可ト決セリ竟ニ其書ヲ上奏シ内閣ノ衆議ヲ経 上諭ヲ以テ天下ニ頒布セラルヽモノ癸酉七月第二百七十二号ノ公布是也凡リ地方官ノ之レヲ可ト決シ言論ナキモノハ何リヤ蓋シ前ニ陳述スル戦国ノ餘風ヲ受ケシ各縣各種ノ方法ハ封建割拠ノ時土地人民ヲ私有セシ日ニ行ハル可クシテ一視同仁ノ世ニ行ハル可キヤノニ抵ス然リ而シテ其四ヲ改メントスルヤ再検地押ノ行ハレ難キハ勿論衆ノ知ル所ナレハ更ニ一種ノ税法ヲ設ケント欲スルニ別ニ奇策ヲ得ス偶金額税ヲ施サントスルモ時宜ニ適セス

金額税ヲ施サントスルモノハ正米納ノ煩雑ニシテ民費モ亦甚敷ナカラサレハ各地数年ノ貢額ト数年ノ石代ヲ平均シ一村一郡ノ貢額ヲ定メ以往数年間ノ定貢トナサントノ旨趣ナリ然レトモ旧時ノ税額ヲ以テ以往ノ目的ト為スカ故ニ前キモノハ更ニ軽キヲ得ス軽キモノハ更ニ平ニ帰スル能ハス到底旧法ノ面目ニ変ルヲミテ人民得失関セサレハ竟ニ其説中止セリ

故ニ地租ノ法ノ價ヲ見テ稅ヲ賦シ收利ヲ見テ地價ヲ定ムルヤ其始メ之ヲ整頓スル實ニ容易ナラスト雖モ地價一定ノ後ハ收租ノ方法簡易明白ニシテ上下共ニ其便利ヲ得ヘキヲ以テ各員之レヲ可トセリ

是ヨリ前各藩所領ノ政府ノ親管トナルモノハ徳川検見ノ方法ニ因リ三五年間ハ年ニ秋穫ノ多寡ヲ検ミテ其年ノ貢額ヲ定ムル方法アリ此法ハ旧幕慣習ノ方法ヲ參酌シ庚午年大藏省ニテ議定スル所ナ

然レトモ其法タルハ公平ニ似タリト雖モ一村内ニテ或ハ或ハ所ノ年列粒ヲ審査シ村貢額総計ヲ定ムルヲ以テ人民ハ上ニ取リテハ良田ヲ持ツモノ益トナルヲ時トシテハ下田ヲ持ツモノ益トナルヲ若シ然ラストモ検見役人ノ目算ニ誤謬アル内ハ其レヤ不公平ヲ生スルヤリ四幕時ハ地方ノ吏員ヲ其職ヲ世ニシ幼サヨリ其事ニ慣熟シ地方ノ肥磽ト其收穫ノ如キ検見セスト雖モ大略ノ算計豫メ了然其胸中ニアルヲ以テ其法ヲ示ス事ヲ得タリ然レトモ其情ニ熟スルヲ以テ流弊モ亦多

而シテ今日置縣ノ如キ東京ノ人九州地
方ニ建事モ西南ノ人北國ニ任用セラルヽ如キニテハ
地方新租ノ事情ニ暗シ必ス検見スルモ真
平準ヲ得ルヲ期セン乎故ニ地方役事ノモノ
検見スルニ当ツテハ富ヲ寛ニ失スルモ酷ニ失スルヲ
戒ト又是ノ志四法ノ苛酷ヲ救ントスルニ在リ然
ルニ事情不然ラサルヲ得ス故ニ近来人民等ヲ
検見ヲ企望セリ加之延宋ノ如キ一縣内
数種或ハ三十余種アルアリテ収入額ハ
十ヲ以テ甲ハ五斗ヲ一斗或ハ二斗ヲ納メ乙ハ五斗

ヲ納メ或ハ二斗モ納メサルアリ其実畢竟
重ハサテ置名義ノ偏頗ナルニ以テ地方官モ
勢カメテ之レヲ改ント欲スルカ故ニ検見
ヲ以テ真額ヲ定メントスルノ念慮アル
リ如此人民ト地方官ト相シク検見ヲ
欲スルカタメ事情ノ正ヲ得サルアレハ当
省モ之レヲ拒ムヲ得スシテ其申請ニ応
スル代ハ必ラス旧額ニ比シ十分一或ハ十ノ二
ヲ減スルモノ往々有之然リ而テ其減スルモノ
個所ハ完租ノ一人毎ニ徴収スヘキ不足ヲ

仁政ト云フモ可ナレ共或ハ豪富ニ利シテ貧窮
ニ及ハサル弊アリ故ニ政府ノ歳入ヲ減ズルモ宜敷
民ニ及ハサルノ弊アリ
尓来旧法ノ格外偏重偏軽ナラサルモノハ後来改
正ノ秋マテ暫ラク旧貫ニ因襲スヘキ旨及指令
置県ノ地方官モ人民ニ対シテ改正ノ趣意
アルヲ以テ暫ラク旧貫ニ拠置ノヲ説諭スルヲ
得ルト雖モ惟旱水ノ憂アルヲ以テ旧税
額ヲ保ツ能ハサル郡村ハ往々破免検
見又ハ申請ヲ而シテ破免ノ上旧額

ヨリ減スルモノ追、上申有シ其減スルモノハ天
災ニ属スルト雖モ亦旧来ノ偏重ト官
吏用法ノ斟酌トニ因リ減スルモノ若干
ニ居レリ
旱年ハ畑田ニ利アリ水損ハ旱田ニ利ア
リ仮令多旱並殞ルト雖モ癸酉ノ如キ
ハ大略以テ中年ノ上ト推想セリ然ルニ
同年検見破免ノ多キ本年ニ比リテ
各地ノ上計概算ヲ審按スルニ甚シ
ハ一ノ二三ヲ減ニ或ハ其一ヲ減スルアリテ第

ヲ問算ト適合セサルモノ比ニ之アリ
地租改正ノ止ムヲカラサルモハ現今地租ノ
入ノ景況若シ陳述スルカ如キニ因リ古
事悟ニヨリ論スルトキハ強テ旧法ヲ従持セン
トスレハ検見ヲ実行スレハ若干減租ナキヲ免カレス
実行スレハ得ス検見ヲ
加之反別諸畝ノ地ト旧来反別ヲ用ヒ
サル地ハ検見ヲ実行セントスルモ決シテ
能ハス従今簿上ノ反別ヲ
頼セルアルモ実係ハカナシ

ス然ラサレハ検見強行スルニ当リテハ大概沢ノ
均一ノ賦税ヲ徴スル能ハスシテ多ク物議ヲ生スベシ
又如此十六日法ヲ従持セント欲スルモ今日ニ当リテハ
決シテ能ハサルノ勢アリテ一種ノ良法ヲ設ケザルヲ
得サルノ時勢ニ至レルヲ
今地方税ノ方法タルタル従価百分三収入ノ則
ニシテ其ノ価ハ凡リ実利ノ十分ノ一ニ有奇ヲ以テ算
ナリ若シ現収後百分ノ以テ算スレハ其二十四
ヲ納スルモノトナス之ヲ四法ニ比スレハ
四倍半法ハ五公五民ノ税アリト雖モ検見上年減二割ノ
法アルヲ以テ四公六民ノ割合ナリ而シテ実際ニ於テ程度

当年スヒ、法アルヲ以テ公ニ実什二ヲ以テ大概三公
七民ヲ以テ公四民ヲ以テ公ニ公一民ヲ以テ公ニ
ト雖モ容赦多ク絶ヘ接リ救助シテ生ヲ全ウ
神ヲ以テ惜ミ之レヲ苦ミ之レヲ苦ミ名称ノ如クニ公ハ
而分中四ヲ減スルモノニシテ尽適当ノ税額
ト称スヘシ

抑農民ニ対シ税ヲ徴収スルモノハ往古ヨリ農民
分カレサル中人ヲ皆ヨリ役アルヲ免カレス故ニ農
税ノ軽カリシモ武特政権ヲ私スルニ及ヒ
ヨリ農民ヲ分カレ所謂武士ナルモノ戦闘ニ
従事ス農業ニ専ラ力ヲ隙敵ニ備ヘシ収
ムル所ノモノヲ以テ普通ノ租ト武士ノ報

フノ論異ト雖モ得サル勢ニ出ル
ニ如ク此等ニ及ヒシナルヘシ抑忘稼穡
ヲ重シスル国風ナレ農ニノミ税ヲ負ハセ
シモ亦自然ノ勢ナリ而シテ職工商
ニ偶シ税ヲ賦スルモ軍工奚かの名義
ヲ以テシ全ク御ノ恤ミシミルハ最
不公平ト云フヘシ今ヤ萬民国一ニ役ヲ
務ムルニ至レハ農租ヲ軽減シ工商
ニ一時ノ地位ニ乗リカ力ヲ以テ
ノ如ク儀ニ至ル所ナリ

若傳説する所は地位降上の由来なりと雖
も上傳せる所の如く都鄙小に世を而こう共い遠近後
経家の旧職なる故まく其結果を得ると雖も
皆無調書の品位及び諸品の申請する所を参考
せるに元弘の表のめく成家ふ元弘の置るべうふ元と
る地位降上の止むを可らさるに家系異陳なる所
所の如し無り而して此事業多き至大
事なる別論小して万一るの事実に至り
多少の紆余顧議を生ずることなく下
衆庶小信ず失ふのなかふ国家の一大患

を醸成ほへくと徐ノ焦慮ほる所なり因て
ハ今小於て尚ほ慮の止前案の廟
算を確定なんことを企望ほ

祖税頭杉方正義

地租改正増減概表

全國ニ於テ租税ヲ一地租ニ改メタル以来ハ九ヶ年ヲ経タルモ今ハ
ヨリ顧ミルニ人民ハ安堵シ国庫ハ豊饒ニ至リ頗ル
産額ノ増加ヲ来ス所アルモノヽ如キ其ノ故ハ地租ヲ改正シタルモノヽ
別地ヲ於テ何ノ事ヲ変更シタル法ヲ於テ公一ナラシメ他
石高ノ三倍ヲ納ムルニ至リ人民ハ其産業ヲ失フ
ヲ以テ或ハ西ノ方九ノ方ヲ以テ一反ト

大蔵省

ありしものなれども性情に載するに至りては皆其
実に適ハざる故に先づ是等の廣狭経界等を
整理せしめ而して後ハ旧税の寛苛軽重
等を新税に増減する所へ斟酌せしめ益
仍て壬申地租性毛の石高を以て旧石
高を廃し更に隠田切添縄延等の税概ね
石高に増す者を除き之を以て新石高とし
収穫米価ハ凡そ五ヶ年の平均を以て地価を算
出し増減を概略見積るに之を統計するに或ハ増
すべきもの有り又減ずべきものあるべしと

雖も従前の税に比すれハ大抵其重きを得るもの
多ければ地価百分の三を以て課税の定
率となし以て従前の額に比すれハ減ずる
ところあらん多くして増ある処少く増額を以て
減額を償ふに足らず其他貢米の如き定
米口米の類大率六拾万石を収入し来
りし是等ハ皆く後世収斂の余弊
なる雑税の類なれども一旦廃するときハ課する所のもの
課せられたるものの内に免除せられたるもの
而して其口米に換ふる如き物ハ郷次の賦

年の法を設て一地方の用度を仕ふ
之を合算するに弱き金六百万円を
額とするの形なれども実数を求め
き難き算なし然し数の実際を原とし
うるに足らず故に今日の
設きのみ概略を概算きるのみ

総計 三府六十県

旧反別	田	百七十六万弐千五百四十五町七反歩	合三百三十三万三千五百九町四反歩
	畑	百四十七万九百六十三町七反歩	
仮反別	田	弐百二十六万六千三百五十四町五反歩	合四百十弐万九千七百七十三町弐反歩
	畑	百八十六万三千五百十六町七反歩	
舊税	田	弐千七百二十九万九千百五十七石四	合三千七百三十五万五千七百二十四
	畑	七百三十八万八千五百六十六石四	
	田畑	弐百七十六万七千九百八十六石四	
新税	田	二千五百八十五万八千七百四十四石四	合三千三百五十三万七千四百三十六石四
	畑	七百六十五万八千七百三十八石四	

大蔵省

税金比較	坊	二百四万八千六百四十三円			
	減	五百八十八万六千六百八十四円			
旧反米代金	田	七千四六十八石七厘七毛余			
	畑	五千五百七十七石七厘九毛四糸八			
一反地価	田	三十八円三銭四厘四毛			
	畑	十三円六十九銭九厘四毛			
一反地租	田	七千四十四円七十六銭。三			
	畑	四千七百七十九銭九毛八三			

差引減三百八十三万八千三百六十三円

外 第五十九万石 謂貳百万石ノ誤カ 不減

代金弐百二万五千円

但七千石三円五十銭 移リ

地所賣買放禁分一收税法 大藏卿大久保利通

施設ノ儀正院伺

大藏大輔井上馨

税法ハ治民ノ要務ニシテ理財會計ノ基本ナリ

其當否ニヨリ邦國ノ隆替人民ノ盛衰ニ關渉シ至

大至重ノ要件タル今更喋々論辨ヲ不俟抑

皇國中古以降慣行ノ税則ハ戰國ノ遺法ニシテ

妥當ヲ得サルモノ多シ既ニ地ニ石高アリ貫ト高アリ

東高アリ無高アリ無反別アリ税ニ檢見法アリ定免

法アリ一六公五民モ名有テ其實大ニ不同アリ其他雜稅
等ニ至テハ千差万別枚擧ニ遑アラス加フルニ害據ノ
陋習比鄰法ヲ異ニシ農民苦酷ニ苦シム一久シ八テ
ヤ改權一ニ
朝廷ニ歸シ凡百ノ政務齊一ノ際治國ノ樞要ナル
稅法ニ於テル均一ノ法則ヲ設ケサルヘカラス茲ニ於テ古來ノ
沿革當今ノ形勢内外ノ制規等夫々探討考覈
審議細案仕候處斷然從前ノ方法ヲ廢棄シ
一般ニ地所ノ賣買ヲ許シ更ニ地代金今一ノ收稅法
ヲ施設スルニ如カス此法ヲ設ル片ハ第一耕地ノ廣狹地
味ノ善惡秋毛ノ微ハ不論等撿査ノ煩勞ヲ省キ前ニ
陳述スル數件ノ錯雜ヲ一掃シ年來ノ通患一朝ニ
氷解シ前日偏頗ノ田租稍平準ヲ得テ億兆ノ
農民一樣ノ恩澤ニ浴セン一實ニ此ノ方法ニアリ最新
法速成ヲ戒ム其施行ノ順序ニ至テハ許多ノ法則
更張無之テハ難相成殊ニ從前地代金ノ高低當ニ
地味ノ肥瘠ノミニ不拘多ク貢租ノ多寡等ニ因リ
然ルニ一時ニ之ヲ釐革スル片ハ均一ヲ需メテ却テ不公平ヲ
釀シ實際ニ於テ扞格ノ憂無之ヒ難申故ニ時勢
人情ヲ揣リ逐次施行先ツ以テ地所永代賣買ヲ

許シ各所持地ノ沽券ヲ改メ全國地代金恕額
ヲ檢査シ而後更ニ簡易ノ收稅法ヲ設ケ預メ
弊害ヲ防キ民ニ示スニ毫モ疑ヲ容レサル畫一ノ條令ヲ
以テセハ永世不拔ノ良法ト奉存候間
御制可ヲ蒙リ候ハ追々取調可伺出先以改革之
順序御布告條目案相添此段奉伺候也

壬申二月

伺之通

太政官

布告

地所永代賣買ノ儀從來
禁令ノ所自今四民共賣
買致所持ノ儀差許ス事

太政官

今般地所永代賣買被差許候ニ付
今後賣買ニ幷讓渡ニ付地券渡方ハ
別紙規則ニ通可相心得事

壬申一月

府縣

大藏省

地所売買譲渡ニ付地券渡方規則

第一

一 地所売買譲渡ニ節地券相渡候ニ付而者於府縣元帳ヲ製シ地券中受ケ係願出候者別紙雛形ニ通地券本紙并ニ却丈二枚ヲ書〻押切印ニ上本紙ヲ地主ニ與ヘ控ヲ右元帳ヘ綴込置可申事

第二

一 右元帳を以地券と大帳と定め以後毎年分綴込置
一箇年分収纏冨壹通大蔵省江差出置
申事

第三

一 地券申受候節別紙願面書式通り相認
為願出可申事

第四

一 右願出有之候節雙方情實為相糺相違無
之候ハヽ地券相渡可申事

第五

一 一筆毎地所を裂き賣買致候方願出候分ハ
實地におのゝ惣歩數を改検地帳江照合し
引分ケ方偽願無之様相為査之上願通取

閑屈地券ハ渡可申事

第六

一 古地券ヲ地所持主ゟ確證ニ付大切ニ可致不持旨兼而相諭置ニ申候第一水火盗難而地券を失ひ候若ゟ二人以上ニ証人を立村役人連帝を以書替ニ係為願出可申事

但盗難ゟ而失ひ候分後日ハ知ル候ハ

早速可申出請書取置ニ申ゟ

第七

一 初發地券ハ渡候以後賣買譲渡ハ一切ニ代替り其外質地流込ゟ而持主相替り候ハ地券ニ裏ニ雛形ニ通り相認地券書替ニ係ル所出ス事

第八

一 古書替願出候節ハ其情変を吟味して
後新地券を渡し旧券を消滅し
尤大帳に地主名相誤り山林並地代重複減
ゝ者ハ年月日共詳記置一箇年
分原籍大蔵省に可届出事

第九

一 山林原野其他之地所ハ夫々地券渡に付地券

相渡ル分ハ同様可相心得事

第十

一 願よりて荒蕪之地所拝下ケ之者ハ同様地券
可相渡事

第十一

一 新規書替ハ地券申受候節御下渡之
左之通り上納之為取事

徴印税

地券ニ記セル

金高

百圓以下　千分ノ五　即十圓ニ付五錢

同　百圓以上　弐百圓迄　五十錢

同　弐百圓以上　五百圓迄　一圓

同　五百圓以上　千圓迄　一圓二十五錢

同　千圓以上　弐千圓迄　一圓五十錢

同　弐千圓以上　五千圓迄　二圓五十錢

同　五千圓以上　三圓七十五錢

第十二

一　永後地券を不申請密賣買致シ候者ハ其地所并代金共取揚可申事

一　改連帯候村役人ハ代金ニ応ジ通罰金ヲ申付事

第十三

一 従来之村々追而地券渡〻方之係り
わたす事

第十四

一 東京府下を始治券税法申達之上ハ此規則之
例にあらさる事

右之通相心得候事

奉願候田畑地賣買之事

某國何郡何村之内
何番
字何〻

一田畑 何段何畝何歩 持主 何之誰
同郡同何郡何村
此高何石何斗何升何合
此地代金何拾何両
買請人 何郡同何村 何之誰

但是迄之賣入證文添

右地所今般相對之上賣渡且買請申候私儀
相整候間賣買之儀乃閉濟地券ハ渡し申候下
置度依之村役人奥書を以此段奉願候以上

年号干支月

賣渡人右 何之進㊞

買請人右 何之進㊞

前書願之通双方和熟之愛情賣買相違無之度依

依之私共連印を以此段申上候以上

年号干支月

何府縣廳

某國何郡何村組頭 何之進㊞

同 名主 何之進㊞

押切印　押切印

一

一

年号干支月

地券之證

某國某郡某村之内
何番

田何町何反何畝何歩
此高何拾何石何斗何升何合
此地代金何百何拾何両也

畑何町何反何畝何歩
此高何拾何石何斗何升何合
此地代金何百何拾何両也

持主　某郡某村　何之誰

同人

右検査之上授與之

何府知事縣令　苗字名　□

大少屬苗字名　□　受付

林并原野ノ類モ此雛形ニ準スヘシ

年号干支月

地券之證

某國某郡某村之内

字何々険阻平地

一　山反別何拾何町何畝歩　持主　某郡某村　何之誰

立木有無

此地代金何拾何両也

押切印

右検査之上授與之

何府知事 苗字名 □
縣令

大少屬 苗字名 □ 受付

一 地券願請候以後再ひ他之者江賣渡候故或ハ
親族江譲渡候哉之地券之裏江左之事文の
如く相認為願出申事

譲渡證印願書雛形

表書之地所今般某國何郡何村何之誰地代
金何拾何両を以賣渡申候奉存候所聞濟之

上ゝ同人名前ゝ由御書ゝ引換被申下度
依ゝ村役人連印ゝを以此段申願い以上

年号干支月

賣渡人　何之誰印
買請人　何之誰印
名主　何ゝ誰印
組頭　何ゝ誰印

親族江譲渡い品御申願書雛形

表書ゝ地所今度親族兄弟甥姪続合ゝ書ゝ何郡何村
何ゝ誰江お譲申度奉存ゝ間済ゝ上ゝ同人
名前ゝ由御書ゝ引換被申下度依之親類或ゝ組合歟
用友ゝ印
御人お立村役人連印ゝを以此段申願ゝ以上

年号干支月

譲渡人　何之誰印
譲受人　何之誰印

御人

同

行 何之逢市

同 何之逢市

名主 何之逢市

組頭 何之逢市

壬申九月第百二十六號地券渡方規則相
達置庶更ニ詮議之廉有之規則中第十
五條より十七條迄八追而太政官より可達可
申成哉ニ付右三ヶ條相省き壬申九月第
百三十二號同七月第九十四號布達之條々
十五條より十七條迄へ差加猶規則別紙之
通更正相達候事

壬申十月　大藏大輔井上馨

地券渡方規則

第十五條　即ち壬申九月第百三十二号布達増補改正ニ係

一　一筆ニ地所を裂き賣買以ては及儀預こより差許及ニ付ハ舊地主へ測量及ひ分并裂地ニ改い分ける地所ニ番號ハ在来ニ儘据置幾度ニ分裂及共何番ニ内誰持地ニ記一ツ一券狀番号ニ係ハ地所ニ番號ニ不拘券狀渡ニ順番ニ一ツ

改事

第十六條 即ち壬申七月第九十四号布達増補ミニ

一 田畑とも幾筆ヲ合筆以テ一券状一通ニ記し及儀願ひよりハ可差許右掛ミ分ハ一筆限り別冊ニ改し一人ニ付差出地券證ハ其人毎ニ総及別記し一筆限帳ニ冊有ミ股腹書ニ題一筆限帳別冊ニ券状ヲ割印ヲ押し地券ニ番号のみ相記し地所ニ番號ハ総ヲ別冊ニ肩書ニ一ミ記の相渡事

但一筆限帳扣一通り為差出於其廳一村限り取纏置可申事

第十七條 即ち同上増補ミニ

一 證印税ミ儀拾圓以下ニ分ハ都ヲ五錢ニ取立事

第十八條

一 屋敷地ニ外切歩ニ儀ハ百坪以下ハ雖相禁
事
但是迄一筆限リ右以下ニ坪數ヲ所持有ニ
分ハ此限ニ非ス

第十九條

一 地券合筆一紙ヲ以テ渡方相願ヒタルモノハ別冊
一筆限ニ代金ヘ賣買規則第十一則ニ割合
ヲ以テ證印税取立可申事

第二十條

一 総テ人民所持ニ地所後来ニ用ニ節ハ地券ニ
記セル代價ヲ以テニ買上可相成事
但家作等有ニ地所上地ニ係ハ必ヲ持主承諾
ニ上為ニ一尤世上一般利益ニ為ニ用ル

成る節ハ券面通りに代金及び其建物等に
應し相當に手當為致し上地に付事

第二十一條

一 從前切添切開並高外地へ試作致し候或ハ
除地見捨地等へ家屋取立て欲林藪に致開發
等し候種類其他隠田たりとも此度限り一切
差許る間有体可書出旨に付被事

第二十二條

一 地券相渡し候後に於て隠田等有之る節ハ此規
則第十二條密賣買に例を以て所置致事
但隠田ハ賣買に代金無之ハ地所のみ取上
可申且其他所之入札拂取計右代價に三分
通り村役人より取立る事

第二十三條

一 拾帖切畝歩改一一 檢地帳名寄帳小拾帳等
ニ突合さるとも現地ニ景況ニ隨ひ孤ニ地引繪
圖可差出旨既示ニ改事

第二十四條

一 改別等持ニ中立を以て檢地帳ニ引合せ相違無
之ハ据置ニ秩お心得檢地竿入等取計不及候
得共地所境界紛雜ニ渉候支度向ハ一筆限り畝
杭を打地引繪圖為差出落地無之樣實地檢査
可致事

但餘歩有之地所檢地帳ニ比較增歩お成ハ
人民中立ニ通据置右ニ相及一一檢地帳ニ減歩
お成候地所竿入檢査ニ上減歩ニ改事

第二十五條

一 從前高内外ニ不拘社寺鄕藏之類或ハ埋葬地

等地主定り等之分ハ地引繪圖中ニ其譯ヲ記置
事

第二十六條

一村持之小物成塲山林之類ハ地引圖中色分致
可申事

第二十七條

一堤外附寄洲又ハ流作塲等不定地之類大縄塲ニ
ハ成居持主有之ハ格別確定之持主無之地所ハ
入札拂ニ致一持主ハ定免可申若一持主難知
定分ハ拝借地ニ積て相心得可事

第二十八條

一從前高内外ニ不拘郷藏敷村圍穀積藏敷之
類人民ニ關係之分ハ地券を定め一村総持ニ致
事

第二十九條

一堰料堤敷道敷川涂敷等之類潰地高内永引
ミ今ハ自今無税地ニお定め可申事

第三十條

一墓所地ハ後前ニ通無税地ニ可改事

第三十一條

一本田畑と雖ども村民退轉いたし持主無之荒地ハ

其段別を點檢改ヘ札拂ニ積お心得管内
普く布告可改事

第三十二條

一持主有之荒地ハ及別坪數等綿密ニ逐檢査起返
ミ反數勘弁ニ上至當ニ年期を定免代價を記
せしる券状を其持主ニお渡年期中無税ニ
相定事

但荒地券状證印税ハ反別ニ多少ニ拘ラス一番
ニ地所ヨリ五銭ニ印税を収入ス可ク

第三十三條

一 持主無ク荒地并持主有之荒地共一郡限反別
仕譯繪図面お添可届出事

第三十四條

一 村持ニ山林郊原其地價難定土地ハ字反別のみ
記せる券状へ限前ニ貢額を記ス一肩ニ何村公有
地ニ記ス一其村方へ渡置事
但池沼ニ種類ハ同様ニ事

第三十五條

一 両村以上数村入合ニ山野ハ其村々を組合ス一
券同様ニ仕方を以て何村何村ニ公有地ニ徳免
券状て渡置尤其券状ハ組合村方年番持帯適

且つ定事

第三十六條

一 総て山林原野之類段別難お分ハ先以て無反為
る歩一漸次點檢し積て相心得事

第三十七條

一 総て右種類ハ地畏を券状に記載を可一雖ハ
東耕地西字何山南某川北某村字何原ら如斯

詳なる記注を可き事

第三十八條

一 従前無税地に住民有之ハ得た地位下等ニて
他ら望人なきを以て地價く目的難お立節ハ
一反歩 則三百歩 ら地面 に付十圓以上ら地價に定む可き事

第三十九條

一 地所引合相済ハ落地毫之旨地主一同調印ら

上戸長以下ゝ誓文請書可申付事

第四十條

一 右種類地有税無税ゝ區畏を仕譯村限り地券
臺帳ゝ来ゝ記載可致事

右之通相達候事

府縣

地所賣買譲渡ゝ付地券渡方規則中第
一條第二條左ゝ通改正

第一條

一 地券相渡候節地券を最前ゝ雛形通りゝ
懇一地ゝ壱ゝ壱渡地券大帳ハ二ツ折帳ゝ仕立
半枚ゝ二筆宛記載一券状ゝ割印ゝ改置

事

但腹書多分有之分之已計多可き事

第二條

一 地券大帳ゝ年ゝ収税ゝ照準ゝ第一地

券渡滝ゝ上一村限地所ゝ段別地券金高

ゝ総合高原調租税寮ゝて差出事

但総合高原調方分紙表式ゝ通ゝのゝ分得

尤ゝ表式ハ追ゝ一のゝ達事

右ゝ通及更正及條此段相達候也

壬申
九月

大蔵省

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則中第
一條第二條左ニ通改正

府縣

第一條

一地券相渡ス節地券ヲ最前ニ雛形通リニ
認ヒ一地ニ付ス渡地券大帳ハ二ツ折帳ニ仕立
半枚ニ二筆宛記載ヒ券状ニ割印ニ致置

事

但腹書多分有之分之已計多可き事

第二條

一地券大帳を年々收税を照準いたし地券渡済之上一村限地所を段別地券金高ならびに総合高取調租税察して差出事

但総合高取調方は紙表式を通てのおん得

尤も表式は追て一の布達事

右之通及更正及條此段相達候也

壬申九月

大藏省

内國租税改正見込

正院へ申上

大藏大輔井上馨
大藏少輔吉田清成

夫皇國ノ税法ニ於ケル往古ハ兵農不分賦税無別中古ニ至リ政權武門ニ移リ封建ノ制行レシヨリ兵農全ク分レ比隣法ヲ異ニシ農民独リ其重歛ニ苦シムヿ久シ今也皇威煥発郡縣ノ躰裁ニ歸シ百政齊一ノ際經國ノ樞機理財會計ノ基本タル税法ヲ更張セサルヘカラス抑租税ハ人民保護ノ要務タレハ之ヲ出サシム

大藏省

ルヤ上下均一負富公平ヲ旨トス而シテ税法ヲ施設スル當
リテヤ特リ地ヲ耕シカヲ労スル者ニ課スルニ非スシテ物品ヲ費
ス者ヨリ出サシメ有用品ニ薄クシ無用品ニ重クスルヲ以テ
普通ノ公理トス然リト雖モ從来田租ヲ主トシ五公五民坪
取ノ法ノ如キ今俄ニ之ヲ廃セントセハ因襲ノ久シキ既ニ人
心ニ固結シ一時ニ釐革シ難シ故ニ先ツ地所賣買ノ禁
ヲ解キ地券ヲ改メ而メ沽券ノ税法ヲ施設シ或ハ物
品税印税等ヲ起シ其實挙ルニ從テ一般土地ノ税ヲ
薄クシ以テ生産ノ増殖ヲ勸メ或ハ專賣特許ノ税ヲ
設ケ以テ人ノ智識ヲ開キ百工ヲ奬勵シ以テ人工品ノ

増殖ヲ誘導スル則ハ内地ノ物品繁殖シテ國用以テ
豊足スヘシ加之全國ノ地宜ニ應スル物産ヲ育シ邦
俗ニ適スル工藝ヲ闢キ其税ヲ權衡シ海外ニ輸出シ
然シテ我國不足ノ物品ト交易シ海関保護税ノ沽
用ヲ以テ内地ノ物品輸出ノ利害ヲ去就シ海外ヨリ輸
入ノ物品ヲ計較シ其得失ニ從テ之カ税額ヲ軽重シ常
ニ輸出ノ物品ヲシテ輸入ノ物品ヨリ倍蓰セシムルヿニ注
意シ以テ之カ税法ヲ設クル則ハ海外ニ對シテ許多ノ
利益ヲ得ヘシ最モ内地ニ於テハ税法ノ平準ヲ極メ農
民貢租ノ偏重ハ漸次消却シ至當公平ヲ得ルニ至リ

始メテ下モニ偏重偏軽ノ弊害ナク上ニハ年ヲ逐テ歳
入ノ利ヲ増シ實ニ税法ノ要機ニシテ今日ノ急務ナリ
卿微衷ヲ記シテ謹テ公評ヲ乞フ

辛未十月

三府下地券発行

大蔵卿大久保利通
大蔵大輔井上馨

議正院伺

租税收納ノ法制都鄙市村共公平適當ヲ期シ枢
改正仕度方今專ラ詮議中ニ有之漸其ふ容易
ニ事ニ属シ難ク而シテ変制ニ之ニ及ブ亦ヲ以テ
変革ニ向ヒ三府下地租ニ関シ従来地子免除ニ仕
来リシ以テ更ニ租税ヲ納ムル事ニ改ム去迚政府保護ニ道ヲ
失ハス都鄙一様ニ之ニ向ヒ都合ヲ地主ニ及ボシ一ニハ強ク
理ヲ数端ニ分ツ改府ニ費用モ不少ニ和偏
農税ヲ以テ水課シ市井ニ地租ヲ措テ不收ヲ如
何ニ不公平ニ有之ニ追ヒ一般ニ法制ヲ
立テ先ツ東京府下ニ地券ヲ発行改年ニ地租
改正改府保護ニ費用ニ充ル根仕度大蔵卿
下ニ地租收法施行以テ上ハ其成規ヲ以テ實

除ク外ハ取扱ハシ二部関係地之処置
地子免除シ市場ニ係リ為替法適当ヲ得
ル様仕方仍テ規則取調ヲ以テ右ハ許可シ
ル旨別紙達案ノ通当省ヨリ回達ス可シ
仍テ規則ハ追テ御下知ヲ仰ク
五年未十月七日

大蔵省

東京府

其府ニ於テ武家地町地ヲ称
スルモノ自今相廃シ一般地券
発行地租收入ノ儀ハ仰出ル迄
別紙規則書ニ照準取計可
申事

壬申正月

大蔵省

地券發行地租收納規則

第一

自今地券を發行するに為す所諸廳に於て
其の記錄局を設け其事務官員を備へて
地券に係る事務一切を司るべし

第二

東京中各大區を以て分界し大區を
小區毎に地券を四十精密なる地圖を製し

毎分一區番号を附し一の中事

第三

武家地ハ儀ハ後来ハ賜邸并諸侯
上地関係地等ハ交ハ境界堺杭等
甘ハ府先上地ハ堺杭ハ踏査
八札拂いたし一落札ハ金高ハ以て地券
を定特規ハ拂ハ一の手渡ス

第四

賜邸ハ分ハ更ハ地代金を取立ハ雖も堺
杭を改め其近傍拂地代等比較ハ地券
高を極め渡事ハ拂ハ一の手渡事

第五

従来貸附地ハ分ハ其堺杭を踏査ハ是迄
拂借人ハ低價を以て一の拂下ハ地位を
上中下ハ三等ハ分ち左ハ低價標準を
以て拂下代金高百極め上納一の手渡ス

低價標準

一上等　多摩郡ニ付　金弐拾五圓

一中等　同郡ニ付　金弐拾圓

一下等　同郡ニ付　金拾五圓

一相借地ニ低價ヲ以テ拂下ケ候ハヽ其地代ハ地券ニ掲ケタル地代ニ比準ノ地券金ニ対シ拾分ノ壱ヲ付ス以後税金等ニ割合ヲ不公平ヲ為サヽル

一ノ中ニ官有地拂ヒ願ヒ相違ナキ地券ニ掲ケタル地代ニ比準ノ地券金ニ対シ拾分ノ壱ヲ付ス以後税金等ニ割合ヲ不公平ヲ為サヽル

第六

紙幣拂下ケ地代金ニ地券ヲ渡ス時ニ紙幣ヲ渡ス事

第七

華士族卒幼郎等ニ現住ニ相違地ニ外更ニ他ニ地所ヲ拂下ケ願フ者ハ願ヒ

公々入札法を用ゆべしこと

第八

渡来し沽券地を一區毎町名番号所持主
名面并に地所坪数沽券高等巨細に為帯
立更に實地的当番に地券金高を極め
一の証渡事

但地價に的当番を欠くの者は持主より
旧沽券に拘らず実地現今相應の代

價を為書出申候事一自然不都合に
代價を書出候ものは第十三条に準ず
所置に属す

第九

是迄開墾地に名目に相成居候ものも現今
市街に景況に相成或は家宅を建築し
其近傍に地所に照準し相當に地價を
定地券相渡申事

但此地價を改むる時は二度目納の分は
金高を勘定し納め候地券金高より
間金は上納不及の事

第拾

地券は弐枚雖形通り証拠并控二枚
を書し証拠は地主に與へ控は役所
綴込置し量一の事

第拾壱

地券弐枚帳を製し地券に畫書を認め
量是を大帳と定め事に地租も此大帳に
照して收納の段事

右の大帳を二通り製し一通は大蔵省へ
送り残一通は県庁に置て帳面に記載
なし分を一通事務繁雑なる故同省に一の和届事

第拾弐

質入の地面流込の者或は他人に売渡

左有書替中受度者を地券に裏に書式に
に倣ひ双方連印に裏書を以て出張時を
府廳なりを右に裏書を見て行に情實を
吟味して後新地券を與へ旧券を廢棄して
尤大帳地租に代替り其年月日を詳に書
載の筋なり
但未墾人或は就成の遺物又は割與筋及
旨を地券中受規則に据合を以て取立る

時に書替濟方ホ文に通の筋なり
第拾三
地券を受る者中立る代價を不拂當を
密に所を答る增價に成中後不伏筋及
時を其地所番号及び中立る代價を府
下に布告して望る者入札の筋義れば
を以て地所を讓ることを若持を讓り
渡る中を否まを為れば價を以て地價

一地券ハ官ニ一部事

落札ニ限リ以田地ヲ抵当ト為シ借受ル者ハ最初中立ニ限リ入札ニ限ル

間金高ニ二割上納ス可キ事

但入札ニ依テ地券ヲ定ムル以ニ

法ニ拘ラズ其際ニ於テ願ル者ハ

ニ得ル者ハ有ル時ハ入札ヲ入金不済ニ

付法ニ設置第一近傍備地ヲ見合不

ル者ハ備地中立ニ付ル者ハ当人及ビ

組合長ヲ以テ反復説諭ヲ加ヘ猶願

一ノ段ニ上ル者ハ承伏ス段ニ及ブ得已

似ル熟議ニ上入札法ヲ施ス可キ

右地所落札人ニ譲渡ノ上ニ地円ニ付ル

家作持ル十ヶ年ニ付ル其所ニ居ル借

地代ヲ新地主ニ納ル

但十ヶ年中ニ建物ヲ他ニ移ス又ハ

新地を譲渡し或は普通に借地人を
未墾の分以外新地を相對を以期
限迄に所量の段歩を限中火災等の
灰焼き〳〵時に新築し或は地主に對渡
〳〵する事〳〵

第拾四

新規に書換を地券に受ける者〳〵
通印税の如何の事

地券に印税

地価

百円以下	千分の五	即拾円有五銭
百円以上	五拾銭	
弐百円迄	一円	
弐百円以上	一円弐拾五銭	
五百円迄	一円五拾銭	
五百円以上	弐円五拾銭	
千円迄	三円七拾五銭	
千円以上	五円	
弐千円迄		
弐千円以上		
五千円迄		
五千円以上		
一万円迄		
一万円以上		

第拾五

右印税ハ其月限取纏ハ名前書類ニ付
區別町名何某ト巨細ニ仕譯ヲ府印ヲ押シ
大蔵省ヘ一ヶ月納事

第拾六

地租ハ俄ニ一度ニ通収納ノ段事

地券ニ記セル金高ニ百分ノ二
外ニ廨費金ニテ

税金ハ家屋ノ分 三戔
地税并ニ廨費金ハ目今第条ニ通リ
定ニ難キ時ニ實況ニ因リ格別低
ノ段等ニ事
右地租ハ年ニ六月十月両度ニ収納
第二十一条ニ通リ納方ノ段事

第拾七

廨費金ハ俄ニ収入ノ明細帳ヲ製

大蔵省より出し金を府庫に止置記録
局入費之の元事

第拾八

地券之地所ハ所持者地租償納之
ふ及ひ其地に廣狹あて其區域を為所調
入札拂之の事

第拾九

地券を失し紛届出ある其情

實に信を徒に貴否を糺して後新地
券を與ふ可き事

第弐拾

地券よりハ新地券を引換ふ舊地券ハ
世間に廣ける趣を諸出書式に通一の
布置事

第弐拾壱

地券受ける者地を書造する

地租納帳を以て出雲に登録し通稅部
を調の時地券と同時渡置こと
地租納めの節納帳一の写を出雲に大帳
高を照合して納帳に全高を大帳に押
切し雜部に通達し渡す事を指記入調印し
其納帳を下渡し一年に地租六月
十月中両度に取納まる區の所
に記載する明細帳を添大蔵省

一の出納事

第百拾弐

地券を中受ケ所持致いたす其地所に
持ちる向後売買必ず持を承諾
の上たるべし尤世上一般利益の為御用
相成る筈に付面通り代金授受建物
所有者に申渡置事

第百拾三

爾後五年毎に地券書換を景況より見
地券に検査の事
但五年未満売買の分は
或は天災等変地の分は地券書換
不申分は此例に不及事
第弐拾四
各区中戸長並諸入費の分は地券
金高割合出金申付規則を

府庶に於て取設け申事
第弐拾五
社寺現在の境内は之を除き無税地の類
は第四町地等の番号を付遠近通り更に
上地の分は別に一の番号を計事
但社寺境内地に限り従来の通り仰出
第弐拾六

諸官省市用地免租之物産生育所
或牛馬牧場并之病院貧院ニ如キハ法令
之定地税并市街諸費用共一切拂事

第弐拾七

此規則ハ目今ノ景況ニ相宜シキヲ以テ
示後施行ノ後實際ニ於テ故障ナクシ
於改正ヲ要スル事アル可シ

第弐拾八

此掲ル條例中一般必ラス量ル也一ノ産
及ル地所ニ係リ為ス必得量ル能ハス府県
於テ規則ヲ調ヘ上施行スル可
キ事

右ノ通リ定ル事

壬申
正月

大蔵省

石高廢止之儀

正院伺　　大蔵大輔井上馨

田畑石高ノ稱ハ文祿慶長ノ際ニ起原シ其頃一歩ヨリ穫ル所ノ米額ヲ段別ニ盛付ケ其多寡ニ隨テ品位ヲ區別シ之レヲ石盛ト名付ケ以テ石高ヲ極メ租稅ハ勿論民間ノ公費ニ至ル迄悉皆高掛リヲ以テ賦ノ定規ヲ致來候處歷年地勢ノ轉變ニ隨ヒ地位頗ル顚倒シ大ニ平準ヲ失シ候得共檢地改正ハ容

易ニ難被行ニ付享保度ニ至リ更ニ檢田色取ノ方
法ヲ設ケ貢租ハ總ニ平均ヲ得ルト雖モ堤防道路ノ
修築其他民間ノ公費ハ猶必石高ノ多少ニ據テ
配賦致シ候得其不公平ナル素ヨリ不俟論甚シキニ
至テハ一歳ノ收穫ヲ以テ其配賦ニ給スルニ足ラス遂ニ
物ヲ添他ニ嫁スルニ至ル茲ニ於テ下民本田ヲ棄テ新
田ヲ開耕スル者日ニ多シ何トナレハ古田ヲ耕シテ年々拾
石ノ米ヲ收穫スルモ高掛リノ多キヲ以テ七石ヲ消却
スレハ所得三石ニ過キス新田ヲ耕スヤ年々五石ヲ收ムルモ
石盛ノ低キヲ以テ費ス所一石ニ過サレハ猶四石ノ作德アリ

故ニ終ニ十石ノ沃壤ヲ棄テ五石ノ瘠土ヲ力耕セサルヲ
得ス是皆石高ヨリ醸成スル弊害ニ有之殊ニ前途地
券稅法施行ノ際空名ノ石高ヲ存在スルトキハ地價
ノ適當ヲモ妨障シ實ニ有害無益ノモノト奉存候就
而者此節斷然石高ノ稱ヲ廢シ而後地方ノ費用ハ
多クハ地券代價ヲ以テ割賦為致隨テ沽券稅法ニ
改正仕候得ハ人民各自作德ノ多寡ヨリ生スル所ノ
地價ハ則チ所有ノ資本タル道理ヲ熟知シ互ニ相比競
スレハ高價ノ地獨リ高價ニ居ル能ハス低價ノ地モ亦久シク
低價ニ安ンスル能ハス其權衡ヲ以テ自然公平域ニ歸

着シ年来偏頗ノ弊ヲ洗除シ初テ地位相當ノ賦
税ト相成農民勉励國力培殖ノ基礎確乎相立可申
加之當今新開ヲ始メ切添隠田改出ノ分石盛附可
致儀屢有之候處到底無用ノ手數ニ候得共一般慶
止無之上ハ不得止施行候儀ニテ殊更貧高無地高
等ノ所分ニ至リ候テハ頗ル困難實地事務上最モ
差閊不少候間速ニ石高慶止ノ儀御發令相成
候樣伺度依之御布告案相添此段奉伺候也

明治六年三月

伺ノ通布告案ハ別紙ニ掲ケタル如ク改正ニ付テハ布告ハ其方ニ於テ取扱スベキ方法ハ追テ沙汰アルベシ

地租改正ノ儀　大蔵省事務繁劇

正院伺　参議大隈重信

地租改正ノ儀ハ壬申正月中上言仕置通有之
全國一般地所壹反壹畝ノ名許ニ壹畝ヲ毎
漸次地券相渡ル規則出發ノ相成前條地券
税法發令ノ端緒相開ル後尚又一般地券渡方
之儀陳述仕置年七月各地方官ヘ布達以来
日今ニ至リ追テ渡方ノ手順相運居候ヘ共尚永遠

改正着手し方法取調ふ上可仰上裁旨有之
旨を以今般地方官會同議事し際地租改正
之儀評議致し旨を以各地方議員中或を着手
後急し見込都失同意し旨を將来到底地券
税法施行すへきを一決し議員中より数名を
撰擇して租税頭等と熟議し上租税寮に
於て生着手し方法を調査等案を設形示
再と議事場に出して討議せ免各議員に
意見を問て都修正を加へ則甲印簿冊に通
決議仕旨抑税法施設し要を特り地を耕し

力を勞せるもの課せ免して物品を消費
せる者より出さしめ物産の繁殖を誘導し
國の殷富を資ふ為以本旨と致し旨を
地租に如さハ則耕耘勞力し者より收入米穀に
儀に旨を得を今一層種々相課し旨方経濟に本旨と
相適し可申旨を得を回米税法ハ事実之を五地に
の賦課し生地上に有し旨物品諸税の如きハ
措て不問して負担に生税額をも地租中に包含
米穀に相成者し即今之を區分難致旨
先以当今ハ地價百分の三を地租の額に相定

今後物品諸税を興し一定税額を増加するに
随て漸次地租と物品税の区分し遂に地租を
原價百分の一に帰着せしむるを目的として以て調
査儀を尚生徒巨細を儀を乙印簿冊中に
詳論仕度尚亦熟考相成度依て別冊
或数相添申上度や

明治六年五月

但し面倒の冊おせり省上梓ぶの事出る
但し或告論の事出る

地租改正法

上諭

朕惟フニ租税ハ國ノ大事人民休戚ノ係ル所ナリ。從前其法一ナラス。寛苛輕重。率ネ其平ヲ得ス。仍テ之ヲ改正セント欲

シ。乃チ所司ノ羣議ヲ採リ。地方官ノ衆論ヲ盡シ。更ニ内閣諸臣ト辯論裁定シ。之ヲ公平畫一ニ歸セシメ。地租改正法ヲ頒布ス。庶幾クハ賦ニ厚薄ノ弊ナク。民ニ勞逸ノ偏ナカラシメン。主者奉行セヨ。

明治六年七月廿八日

第二百七十二號

今般地租改正ニ付舊来田畑貢納ノ法ハ悉皆相廢シ更ニ地券調査相濟次第土地ノ代價ニ隨ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト可相定旨被仰出候條改正ノ旨趣別紙條例之通可相心得且從前官廳并郡村入費等地所ニ課シ取立来候分ハ總テ地價ニ賦課可致尤其金高ハ本税金ノ三ケ一ヨリ超過スヘカラス候此旨布告候事

明治六年七月廿八日　太政大臣三條實美

地租改正條例

第一章

今般地租改正ノ儀ハ不容易事業ニ付實際ニ於テ及覆審按ノ上調査可致尤土地ニ寄リ緩急難易ノ差別有之各地方共一時改正難出来ハ勿論ニ付必シモ成功ノ速ナルヲ要セス詳密整理ノ見据相立候上ハ大藏省ヘ申立允許ヲ得ルノ後舊税法相廢シ新法施行イタシ候儀ト可相心得

事

但一管内悉皆整理無之候共一郡一區調査濟ノ部分ヨリ施行イタシ不苦候事

第二章

地租改正施行相成候上ハ土地ノ原價ニ隨ヒ賦税致シ候ニ付以後假令豐熟ノ年ト雖モ増税不申付ハ勿論違作ノ年柄有之候トモ減租ノ儀一切不相成候事

第三章

天災ニ因リ地所變換致シ候節ハ實地點檢ノ上損隤ノ厚薄ニヨリ其年限リ免税又ハ起返ノ年限ヲ定メ年季中無税タルヘキ事

第四章

地租改正ノ上ハ田畑ノ稱ヲ廢シ總テ耕地ト相唱其餘牧場山林原野等ノ種類ハ其名目ニ寄リ何地ト可稱事

第五章

家作有之一區ノ地ハ自今總テ宅地ト可相唱事

第六章

從前地租ノ儀ハ自ラ物品ノ稅家屋ノ稅等混淆致シ居候ニ付改正ニ當テハ判然區分シ地租ハ則地價ノ百分一ニモ可相定ノ處未タ物品等ノ諸稅目興ラサルニヨリ先ツ以テ地價百分ノ三ヲ稅額ニ相定候得共向後茶煙草材木其他ノ物品稅追々發行相成歲入相增其收入ノ額二百萬圓以上ニ至リ候節ハ地租改正相成候土地ニ限リ其地租ニ右新稅ノ增額ヲ割合地租ハ終ニ百分ノ一ニ相成候迄漸次減少可致事

第七章

地租改正相成候迄ハ固ヨリ舊法據置ノ筈ニ付從前租稅ノ甘苦ニ因リ苦情等申立候トモ格別偏重偏輕ノ者ニ無之分ハ一切取上無之候條其

旨可相心得尤撿見ノ地ヲ定免ト成シ定免ノ地
無餘義願ニ因リ破免等ノ儀ハ総テ舊貫ノ通タ
ルヘキ事
右之通相定候條猶詳細ノ儀ハ大藏省ヨリ可相
達事

明治六年七月

地租改正施行規則

第一則

今般地租改正被　仰出候ニ付テハ兼テ相渡置
候券面地價ノ儀舊来石盛ノ不同ト貢租ノ甘苦
ニ寄リ高低有之儀ニ付更ニ土地一歳收獲ノ作
益ヲ見積各地ノ慣行ニ因リ何分ノ利ヲ以テ地
價何程ト見込相立更ニ持主銘々ヨリ為申立當
否撿査ノ上適當可相定事

第二則

最前地券渡濟ノ地ハ地所ノ廓落等無之筈ニ候得共自然廓落又ハ殘歩等ノ懸念有之候分強テ舊帳簿ニ據ル時ハ地ノ廣狹其實ヲ失ヒ隙ニ地價ノ昂低ヲ為シ其當否ヲ檢スルノ準據無之候ニ付更ニ精覈ノ及別為申立候樣可致事

第三則

郡村宅地等地價難定場所ハ其村耕地ノ平均又ハ隣村宅地ノ比較ヲ以テ相定候筈可相心得事

第四則

山間海岸其他ノ宅地他ノ比較無之地價難定分ハ一反ニ付拾錢ヨリ不少稅額ヲ定其趣ヲ券面ニ可記載事

第五則

鄉藏其外學校貧院ノ類是迄無稅ノ地トイヘトモ人民ノ共有スル者ハ宅地同樣可相心得事

第六則

一村又ハ數村総持ノ山林秣場等ノ公有地ハ総テ相當ノ地租收入ノ積相心得仮ニ地價ヲ定メ規則ノ通收税可致事

第七則

從前一村又ハ數村ニテ貢租弁納致シ来候堤敷道敷共有墓地等ノ類有之候ハヽ自今無税ニ相定候條其及別ノ可申立事

但從前持主有之分作德米一村ヨリ償ヒ来候類ハ是迄ノ通据置候トモ又ハ一村ニテ右地所買受候トモ相對次第タルヘキ事

第八則

海川ノ附洲湖水縁等ノ不定地或ハ試作ノ地所等及別確定無之分ハ何不定地凡反別何程ト相記シ地價相定規則ノ通收税可致事

第九則

総テ舊来大縄受ノ地所ハ現歩調査ノ上地價相定規則ノ通收税可致事

但舊来大縄受ノ地所トイヘトモ不定地ノ分ハ第八則ノ通タルヘキ事

第十則

渾テ年季ヲ定メ無税ノ積聞届置候荒地ノ儀ハ損害ノ厚薄ニ寄リ更ニ起返スヘキ難易ヲ量リ年季ノ長短ヲ定メ年季中無代價ノ地券可相渡事

第十一則

池沼等ニテ持主有之水草其他ノ利潤アルモノハ相當ノ池沼代價ヲ定メ規則ノ通收税可致事

第十二則

新開場鍬下年季中ノ分ハ其年季中無税ノ積相心得新開試作地反別何程ト相記無代價ノ券狀可相渡事

第十三則

地價調査ノ儀ハ各廳ニ於テ適宜人員相定實地ヘ派出致シ可取調事

第十四則

官員派出ノ上實地點檢可致就テハ持主銘々所持ノ地所一筆毎ニ反別并番號持主姓名相記シ畝杭可建置事

第十五則

村方ヨリ差出候一筆限地價相當ナルトキハ兼テ相渡置候券狀為差出更正ノ反別并地價ヲ券狀ノ裏ニ相記可下渡事

但券狀裏書ノ上相渡候ニ付テハ別段手數料等收入ニ不及候事

第十六則

村方ヨリ差出候地價不相當ナルトキハ調直ノ儀申渡若心得違ノ者有之及理解候上尚不服ノ

節ハ入札法ヲ以テ地價相定候カ又ハ申立ノ代價ニテ可買上事

第十七則

地券調査相濟候ハ別紙雛形ノ通地税表ヲ製シ施行以前租税寮ヘ可差出事

雛形ハ追テ達スヘシ

右之通相達候事

明治六年七月

大蔵省事務総裁
参議大隈重信

別冊地方官心得書相達候条右之内人民へ告知スヘキ條件ハ地租改正着手之順序緩急ヲ計リ實際不都合無之様可取計事

明治六年七月二十八日

大藏省事務總裁
參議大隈重信

地方官心得書

第一章

今般地租ノ改正ハ至大至重ノ事業タル固ヨリ論ヲ俟タス其調査ヨロシキヲ得サレハ從前ノ偏軽偏重ヲ平均スル能ハス故ニ調査ノ間最モ詳覈考按スルヲ要ス

第二章

調査ノ難キ地價ヲ定ムルヲ第一難事トシ土地

ノ廣狹ヲ量ルト落地或ハ重複ノ地ナキヲ検ス
ル亦之レニ亞ケリ故ニ調査ノ間最モ此両件ニ
注意スヘシ

第三章

地價ヲ定ムルハ賦税民益ノ因テ分ル所ニシテ
若シ其毫釐ヲ誤ルトキハ民ノ幸不幸ヲ生ス故ニ
下條ニ示ス検査例ヲ熟記シ土地ノ景況ヲ審按
シ然ル後處分スルヲ要ス

人民ノ差出セル帳簿ヲ検スルノ法

第四章

今調査ノ方法ヲ分ツテ二節ト定ム第一ハ人民
ヨリ差出セル書上ニ就キ其當否ヲ検シ第二ハ實
地ニ臨ミ人民言フ所ノ実否ヲ検スルニアリ

第五章

地所一筆限地價ヲ調査シテ村々ヨリ差出ス時
ハ先合計上ニテ第十二章以下ノ検査例ニ據リ
合計ノ地價目的ノ準據ニ合スルヤ否ヲ検シ準

據ニ合スル者ハ假ニ之ヲ可トスヘシ
ノ算計ヲ撿ス可シ

第六章

人民申立ノ地價ヲ準據ト照合シ準據ノ價ヨリ
低下スル一割迄ノ分ハ假ニ之ヲ可トスヘシ

第七章

若シ準據ノ價ニ合セサル一割以上ナル時ハ其
人民地價商量ノ方ヲ糾シ其言フ所證據アラハ

先假ニ之ヲ可トスヘシ

第八章

若シ準據ヨリ低下シテ之ヲ推問スルニ其證據
ナキモノハ其調査ニ誤失アルモノトナシ其事
柄ヲ厚ク教諭シ再ヒ調査ヲ遂ケシムヘシ

第九章

若シ一村又ハ數村申合收獲米ヲ詐ル時ハ定免
村ハ近傍撿見村ノ坪苅粂ノ歩合ヲ參酌シ其當

否ヲ撿シ彌不相當ト察スル件ハ先一人一戸耕ヤス所ノ畝歩ヲ推問シ從前一反ノ貢額ト村費諸掛ヲ尋問シ其餘ス所若干ヲ問ハヽ其數必ス尠カルヘシ其數尠ナキ件ハ何ヲ以テ生活スルヤト推究シ猶厚ク説諭シ其真ノ收獲ヲ言ハシムヘシ

第十章

第十二章以下撿査ノ法ハ只道理上ニテ地價ノ生スル所以ノモノヲ以テ説明シ之ヲ算定セルモノナレハ所謂理窟ツメノ者ニシテ活法ニ非ラス如何トナレハ元来土地ノ真價ハ都鄙ノ便否人民ノ好惡耕鋤ノ難易營業ノ殊異等相須テ生スルモノニシテ強チ作益ノ多少ノミニ關セサルハ論ヲ待タズ而メ其好惡ト便否トノ如キハ各人ノ胸間ニ含蓄スル所ノ者ニシテ其形ノ露出セルモノナシ故ニ臆度ヲ以テ其價ヲ算知

ス可ラス是ヲ以テ幾回モ賣買シテ各人相競ヒ
相糴ルニ非レハ其実ヲ得難シトス故ニ今其露
出セル實益ニ就キ撿査ノ法ヲ設ク則此法ハ地
價ヲ定ムル要領ト知ルヘシ若シ衆人相競ヒ相
欲スルノ地ハ此算則ヨリモ其價ヲ増スハ必然
ノ理アルヲ以テ必シモ此法ニ拘泥ス可ラス

第十一章

此撿査ノ法タル耕鋤其他ノ諸費ヲ除去シ全ク

所得ノ實益上ヨリ算ヲ起シ来ルヲ以テ此準據
ヨリ減スルモノハ決シテ無シト言ヒ難シト雖
モ多クハ減スヘキノ理ナシ故ニ若シ減スル者
アラハ人民不好不便ノ地乎或ハ違算不調等ノ
アルカ殊ニ能ク其所由ニ注意スヘシ

第十二章

撿査例

第一則

一田一段歩

此收獲米一石六斗

代金四圓八十錢　但一石ニ付代金三圓

内

金七十二錢　種籾肥代一割五分引

殘金四圓八錢

内

金四十錢八厘　地租三分ノ一村入費引

金一圓二十二錢四厘　地租

小以金一圓六十三錢二厘

殘金二圓四十四錢八厘　但假ニ六分ノ利ト見做ス

此地價四十圓八十錢

此百分ノ三　一圓二十二錢四厘

第二則

一田一段歩

此收獲米一石六斗

此小作米一石八升八合

代金三圓二十六錢四厘　但一石ニ代金三圓

内

金四十錢八厘　地租三分ノ一村入費引

金一圓二十二錢四厘　地租

小以金一圓六十三錢二厘

殘金一圓六十三錢二厘　但假ニ四分ノ利ト見做ス

此地價四十圓八十錢

大藏省

此百分ノ三　一圓二十二錢四厘

地租算法

收獲米代ノ内種肥代ヲ引去タル殘數ヲ甲ト名フケ（第二則ハ小作米代金ヲ直ニ甲トス）之ヲ実トシ一年間金利ノ歩合ヘ百ヲ乗シ税率三ト村費ノ一トヲ加ヘ法（譬ヘハ六歩利ナルトキハ之ニ四ヲ加ヘ十トナルガゴトシ）法ヲ以テ実ヲ除キ得ル所ノ數ヲ村入費トシ之ニ三ヲ乗シ

大藏省

テ地租トス

第十三章

自作ノ地ヲ検スルハ第一則ヲ以テシ小作ノ地ハ第二則ヲ以テスベヲ正例ト定ム然レモ各地ノ習慣區別アレハ尚別紙変例ヲモ參酌シ此方法ノ行レ難キ地ハ別段ノ方法ヲ設ケ稟議スヘシ

第十四章

小作米ハ地主ト小作人ト相競ルノ間ヨリ出ルモノナレハ收獲ノ多寡ヲ推知スヘキ確證ニシテ人民互ニ欺隠スル能ハサル者タルヲ以テ第二則ヲ適実ノ者トス故ニ自作地ノ分ハ合計上ニ於テ小作地反別ノ比例ヲ以テ自作地小作米ノ假標ヲ設ケ第二則ニ據リ調査シ其當否ヲ見ルノ參考ニ供スヘシ

第十五章

土地ヲ人ニ預ケ小作セシムルハ自ラ耕作スルト其労費殊異アルハ勿論隨テ收益モ亦多寡無カル可ラス故ニ小作地ヲ以テ自作地ニ比スレハ其利自ラ少キノ理アリ譬ヘハ收益ノ利分自作地六分ノ利ナレハ小作地ハ四分ニテ相當ナルヘレ檢査ノ際尤注意スヘシ

第十六章

小作米ハ地價ヲ求ムルノ標的ナリト雖モ古来

ノ名田小作永小作ノ類地主ノ其地ヲ自由スルノ權利アラサル者及ヒ小作人ニテ貢米諸役ヲ出スノ類ハ此標的ト為ス可ラス

第十七章

今收獲ヲ量ルニ一郡一村中ニ古検新検其他間竿ニ長短アリ區々入交リタル地ハ一歩ノ收獲ニ多少ノ差アルヲ以テ右様ノ地ヲ檢査スルノ際彼此混同セサル様注意スヘシ

第十八章

地價ヲ検査スルノ際種子肥糞ノ歩合ハ一定ノ標的ヲ設ケサレハ比例ノ計算スヘキナシ故ニ第十二章ニ掲クル所ノ收獲米代ノ一割五分ヲ以テ定率トス且土地ニ課スル村入費ハ從前一定ノ規則ナシト雖モ今後地租ノ三分一ヨリ超過スヘカラサルヲ以テ検査ノ際必之ヲ以テ村費ノ定率トスヘシ

大藏省

第十九章

土地ヲ賣買スルヤ各人ノ好悪ニ因リ其利分低昂アリト雖モ其差等ノ如キハ概畧三分利ヨリ六分利マテヲ以テ普通トス故ニ今地價ヲ検スルノ際自作地ハ七分利小作地ハ五分利ヲ以テ其極度トスヘシ

第二十章

米價ハ從来其地ニテ用ヒ来レル各所ノ相庭ヲ

大藏省

推問シ申立ノ米價ト照合シ其當否ヲ檢スヘシ

第二十一章

畑方ハ小作米金ヲ以テ地價ヲ算スルヲ本則トス可シ時トシテハ第二十四章ニ照準其價ヲ定ムヘシ

第二十二章

塩田ハ竈元諸器械モ其地ニ屬セサレハ營業ノ成リ難キヲ以テ地價ヲ定ムル甚難シ故ニ賣買

ノ代價ヲ以テ定ムヘシ

第二十三章

人民所有ノ山林藪澤ノ類其價ヲ定ムル亦難シ其一歲ノ收入ト賣買代價ノ照應ヲ以テ定ムヘシ

第二十四章

總テ收獲ノ利益詳カナラス價ノ當否決シカタキモノハ鑒定人ヲ設ケ實地上ニ於テ其價ヲ言ハシメ變例中第一則ノ意ニ基キ競糶セシメ鑒

定人ノ言ト參酌シテ其價ヲ定ムルモ亦可ナリ

第二十五章

席上ノ調査相整ヒ地價ノ概畧見込相立ツ時ハ左ノ畧表ヲ制シ實地調査ノ目的トスヘシ

新旧税額比較表

	旧反別	旧税額金	改反別	地價	地券税	税金比較 増	税金比較 減	反別比較 増	反別比較 減
田	何程	何程	何程	何程	何程	何程		何程	
畑 宅地	何程	何程	何程	何程	何程		何程		何程

第二十六章

派出ノ人員ハ適宜ニ定ムヘシト雖モ主事タル者ハ權大属以上タルヘシ

第二十七章

實地派出ノ節ハ兼テ地券掛ヲ命シタル郡村附属又ハ地理ニ明ナル者ヲ撰ミ隨行セシメ顧問ニ備フヘシ

第二十八章

実地ニ臨ムニ二タ手又ハ三手ニ分レ派出セハ其始メ一同集合シ先ツ一村ヲ撿査シ着手ノ方法ヲ試ミ各員異様ノ處分ナキヲ要スヘシ

第二十九章

耕地巡視ノ時ハ一筆毎ノ畝杭ヲ改メ落地ノ有無ヲ點検シ廣狹ノ當否ヲ視察シ三四ケ所竿入様歩イタシ書上ノ歩數ト増減アルトキハ再調ヲ命スヘシ

第三十章

様歩ノ上調査整ヒタルモノハ其近傍便宜ノ場所ニ於テ地價ヲ調査スヘシ

第三十一章

前以テ差出セル帳簿ノ代價至當ナルハ実地ト照考シ格別昂低ヲ生スヘカラスト雖モ第七章ノ如キ低價ニ申立タル地ハ殊更注意シ其言ノ実否ヲ撿査スヘシ

第三十二章

若シ人民書上ノ地價不相當ト察スルトキハ篤ト說諭シ猶兼伏セサル寸ハ一村ノ中チ上中下數筆ノ地ヲ撰ミ戶長地主一同立會セ變例第一則又ハ第二則ノ手續ヲ以テ入札セシムヘシ

第三十三章

自然入札法ヲ以テ處シカタキ時ハ其者申立ノ價ヒヲ以テ官ニ買上クルモ申分ナキ歟ヲ推問シ申分ナキ旨申立ルトキハ兼諾ノ請書ヲ申付ヘシ

第三十四章

請書ヲ申付ケ價ヒヲ增サヽルハ先適當ノモノト看做シ置派出ノ人員一同僉義ヲ盡シ猶隣村同位ノ地價トヲ照考シ其當否ヲ定ムヘシ

第三十五章

買上ノ請書ヲ命スルニ至リ請書差出スニ於テ

ハ其申立ノ價ヒ的當ナルニ近キヲ以テ真ニ買上クル手順ニ至ルハ稀ナルヘシト雖モ実ニ詐偽アルト察スル時ハ買上ノ處分ニ及フヘシ

第三十六章

地價ノ參考ニ供センタメ前々ノ割賦帳皆濟帳檢見歩刈帳最前ノ地券大帳地引繪圖等ノ類ハ必ラス携ヘ行クヘシ

第三十七章

常ニ水旱ノ憂アル地ハ其地價モ亦普通ヨリ減少ナルノ理アリ宜シク前々貢額ノ高下ヲ參考シ至當ノ價ヲ定ムヘシ徒ニ人民ノ申分ニ據リ格外ノ低價ニ定ムヘカラス

第三十八章

數村ノ調査畢ラハ最前渡シタル地券ヲ一村毎ニ取纏メ差出サセ地價ノ調書ト共ニ其本廳ニ送達スヘシ

第三十九章

本廳ニ於テハ各所ヨリ送達セル調書ヲ再檢シ其総計ヲ算シ前々貢租ノ額ト新税額トノ増減當否ヲ點檢シ大帳ヲ整理シテ後地券ノ裏ニ更正ノ反別地價ヲ記載シテ下渡スヘシ

但大帳ハ最前調査セル帳簿ヘ朱字ニテ更正ノ反別地價税額ヲ記スカ又ハ新ニ製スルトモ便宜タルヘシ

裏書式

一耕地宅地何反歩　地租　但何尺竿

代價何程

此百分ノ三

金何程

右明治何年何月何日更正授與之

何府縣知事令苗字名印

檢査人　某官　苗字名印

人民ヘ示スヘキ箇條

第四十章

税法改正ニ因リ地價ヲ調理スルハ都テ旧来ノ貢額ニ拘ハラス銘々実際賣買スヘキ見込ノ價左ノ雛形ノ如ク書載シテ進達スヘキ旨村々ヘ布達スヘシ

雛形

何番
字何
一田何反歩

何之某印

此收獲米何程

地價何程

但種肥其外諸費ヲ引去ラス一作又ハ両毛作トモ総テ其地一歳ノ収獲ヲ挙ク可シ

何番
字何
一畑何反歩

此收獲品何程

但畑ハ麥菽茶藍ノ類総テ其品ノ數量判然タルモノハ悉ク記載スヘク其品柄

右同人印

小作人某印

地價何程

但小作米金何程

一屋敷何反歩 何番字何

地價何程

如此一人別ニ相認一村ノ合計左ノコトク仕譯スヘシ

右同人印

ヨリ其量ヲ記シ難キモノハ收利ノ代金ヲ記スヘシ

合何拾何町何反何畝何歩 但一歩何尺竿

地價何万何千何百何拾何圓何拾何錢何厘

内

一田何反歩

地價何程

内

反別何程

此收穫米何程

地價何程

自作

反別何程
此收獲米何程　小作
地價何程
小作米何程

一畑何反歩
地價何程
内
反別何程
此收獲品何程　自作
地價何程

反別何程
此收獲品何程　小作
地價何程
小作金何程

一屋敷何反歩
地價何程
外

一持山何反歩
地價何程

如此種類ハ持主仕譯帳別段ニ仕立ヘキ事

一林何反歩
地價何程
右ハ今般税法御改正ニ付私共村方銘々持地
反別代價等可申上旨御達シニ付私共立會從
前隠田切開縄伸ノ類マテ地毎ニ取調箇所落
ハ勿論隠歩等一切無御座且取揚米並小作米
等聊詐欺ノ儀不奉申上候若心得違ノ儀有之
後日相顯ハル、ニ於テハ如何様ノ御處分有

之候トモ毛頭申分無御座候依之地主一同調
印ヲ以奉申上候以上

何國何郡何村
百姓惣代　何某印
戸長　何某印

年号月日

何府知事
縣令　何某殿

第四十一章

右雛形ヲ作為スルニ當リテ左ニ記スル第四十二章ヨリ第四十四章ニ至ル箇條ヲ管内ヘ布達シ調理ノ際矛楯アラシムルヿ勿レ

第四十二章

一村中古撿新撿入交リ竿縄長短アルモノハ合計ノ内何反歩ハ何尺竿何町歩ハ何尺竿ト記載セシムヘシ

第四十三章

地代金ハ一ヶ年收獲ノ内種肥代其外諸費ヲ引去全ク地主所得トナルヘキ米金ヲ其村從前賣買仕来ノ利息割合ヲ以テ現今五ニ賣買スヘキ者ト看做シ見込ノ代價ヲ記載セシムヘシ

第四十四章

雛形ニ記セル收獲米ハ是迄年々其地ヨリ登量ノ總數ヲ挙クヘシ尤モ其年々豊凶ニ依テ一定

ナラスト雖モ平年作柄ヲ正実ニ書出サシムヘシ

撿査變例

第一則

一一村申立ノ收獲米及ヒ小作米ノ負數不相當ナルカ又ハ諸入費等多分ナル事ヲ唱ヘ撿査ノ筭當ニ當ラス一村申合セテ低價ニ書出セルト察スル時ハ臨機左ノ入札法ヲ施スヘシ

一一村ノ耕地ヲ上中下三等又ハ五六等其品位限リ區分シ雜形ノ如ク調査セシムヘシ

雜形

耕地品位

上ノ部

何番ヨリ何番マテ　何番　何番

中ノ部

何番　何番ヨリ何番マテ

下ノ部

何番　何番

上ノ部何反歩　申立代價何程

合計中ノ部何反歩　代價何程

下ノ部何反歩　代價何程

一右品位ノ内各一二ケ所ツヽ戸長小前一同立會ハセ面前ニテ闔取ヲ以テ糴地ヲ定ムヘシ

一右糴地定マラハ村内及ヒ近傍村々ノ者ヲシテ各自賣買スヘキ見込ノ價ヲ入札セシメ高札人ニ買取ラシムヘシ

一落札ノ代價最前持主ノ申立ヨリ高價ナル寸地主コレヲ賣渡スヿヲ欲セサレハ五圓ヨリ少カラス二十五圓ヨリ多カラサル謝金ヲ其村ヨリ落札人ヘ渡サシムヘシ

一若シ又舊地主持續クヿヲ欲セサル寸ハ其者申立ノ代價ヲ以官ニ買上ケ更ニ入札ノ代價ヲ以テ高札人ヘ賣渡スヘシ若シ落札人即金ニ納メ能ハサル寸ハ旧地主申立ノ代價タケ

即金ニ納サセ其餘ノ間金ハ年賦ニ申付ヘシ

一若シ落札直段持主申立ノ代價ヨリ低價ナル寸ハ持主賣拂フヿヲ欲セサルハ必然ナレハ入札ノ代價其當ヲ得サルモノト見做シ地主申立ノ代價ヲ以テ地價ト定ムヘシ右其申立ノ價不當ト察スル寸ハ時トシテ買上ノ處分スヘシ

一落札代價ノ當否ヲ檢スルニ第十二章ノ例ヲ

以テシ粗適當スルヿハ其當ヲ得ルモノト見
做シ其比類ヲ推シテ一村上中下ノ地價ヲ定
ムヘシ
一一人持地ノ上ニテ代價不相當ト察シ規則第
十六則ノ手續ヲ以テ入札法ヲ施スニ至ラハ
先ツ持主申立ノ代價ヲ公示シテ入札セシメ
其高札最前申立ノ代價ヨリ一割以上ニアラ
サレハ落札セシメス持主申立ヲ相當ト見做

スヘシ
一右地所落札ノ代價最前持主ノ申立ヨリ一割
以上ナル寸持主之ヲ賣渡スヿヲ欲セサレハ
一圓ヨリ七圓迄ノ謝金ヲ落札人ヘ渡サシム
ヘシ
一假令ハ甲所有ノ地ヲ乙落札ニ成ルト雖モ其
地所ニ甲ノ作物アル寸ハ之ヲ其儘乙ニ賣渡
ストモ又甲ハ乙ノ小作人トナルモ都テ甲乙

相對タルヘシ

第二則

一小作入付米ハ小作人種肥手間料等ヲ引去リ其殘數ヲ地主ヘ差出スヘキモノニテ申立ノ負數欺隱スヘキモノニ非スト云ヒ土地ノ慣習ニヨリ強テ檢査例ニ據リ難キ事情アル寸ハ臨機小作米ノ入札ヲ施行スヘシ此法ヲ施行セント欲セハ第一則ノ如ク上中下ノ品位

ヲ取調サセ闔取ニテ糴田ヲ定メ一村ノ中地所持主五六人（此地ノ地主ハ必ス此撰ニ入ルヘシ）小作人五六人（此地ノ小作人ハ必ス此負ニ入ルヘシ）相集メ向後銘々此地ヲ小作セン歟又ハ人ニ小作セシメント欲セハ何程ノ小作米ヲ出スヘキ乎ヲ入札セシメ其高札人ヲ以テ以來其地ノ小作人ト定ムヘシ

一若落札ノ小作米從前ヨリ相增ス寸是迄ノ小作人引續キ小作セントヲ欲セハ元小作人ヲ

以テ其地ノ小作ト定メ五十錢ヨリ五圓マテノ謝金ヲ元小作人ヨリ取立落札人ヘ相渡スヘシ

一上中下各等ノ小作米其類ヲ推シテ通筭シ先一村合計上ニテ第十二章ノ第二則ニ隨ヒ其村ノ地價ヲ筭出スヘシ

地主ハ毎ニ小作米ノ多カランヲ欲シ小作人ハ毎ニ其少キヲ欲スル通情ナレハ小作

米ヲ入札シテ地主ノ申立タルヨリモ多カラシムルハ最難シトス故ニ此法ハ地主ノ申立タル小作米ノ高分外ニ少クシテ之ニ幾分ヲ増スモ尚小作ノ利益アルヘキヲ確乎見据タルトキ及ヒ耕地少ク人民多ク手ヲ乖フシテ毎ニ耕スニ地ナキヲ憂ル地ニノミ行フヘキモノトス若シ深ク此時ト地トニ注意スルヿナク此法ヲ妄用スル寸ハ平

地上ニ風波ヲ起スヿアルヲ以テ最深思熟慮スルヲ要ス

第三則

地主所得ト舊貢米トヲ以テ地價ノ當否ヲ檢スルノ例

一田壹反歩

此旧貢米五斗

此代金壹圓五十錢

一地主全所得米九斗

此代金二圓七十錢

諸費見込除之

外二斗

合四圓二十錢

内

壹圓四十錢

新税引

殘二圓八十錢

六分利

此原價四十六圓六十六錢七厘

此百分ノ三壹圓四十錢

第四則

最前渡シタル地券ノ代價ト旧貢額トヲ根據トシ今度書出セル地價ノ當否ヲ檢査スルノ例

一田壹反歩

舊地券ノ地價三十八圓五十七錢舊稅額存在セル地券代價ナリ

舊貢米五斗

此代金壹圓五十錢　六分利

此原價二十五圓

二口合六十三圓五十七錢

内

壹圓二十七錢壹厘　新稅

此原價二一壹圓十八錢三厘

殘四十二圓三十八錢七厘

此百分八三壹圓二十七錢壹厘

九藏書